

平成28年フィリピン墓参二回め追悼文より

お父さんへ

静岡市清水遺族会 深澤きぬ子

この度の慰霊訪問も遺族会のお陰です。何よりも天皇陛下皇后陛下がフィリピンをご訪問なさる行程の中で、両陛下をお出迎えしての慰霊祭に参加できた事に感謝しています。お父さんたち英霊もきっと有難く感謝していると思います。

さて、終戦後70年が過ぎました。メディアで戦争当時の事が多く報道されています。防空壕の中で赤ん坊だった私も71歳になりました。三人の子供も家庭を持ち孫が7人となりました。母はひ孫を5人見る事が出来ました。平成14年におくりました。

戦争の悲惨さは遺族でなければわかりません。今も世界中のどこかで起きています。多くの英霊や未亡人となった母達の事を思うと、「不戦の誓い」を願わずにはいられません。次の世代へ語り継ぐ事が私達の使命だと思います。世の中の誰もが中流意識を持つようになりました。平和があるのも英霊の尊い犠牲があった事決して忘れません。かけがえのない命を誰もが全う出来る事を心から願います。高齢社会となり問題も様々あります。地域の為に受けたご恩をお返し出来るように頑張りたいと思います。思いは尽きませんが「お父さん、どうぞ安らかに眠りください」

それでは、「戦没者追弔御和賛」をお唱え致します。

- 一 幾山川を隔てつつ み国安かれ世の幸と
いくさの庭に散りゆきし あわれ^{あまた}数多の若桜
- 二 されど捧げし真心に 生死は^{まあい}あらし^{あめつち}雨土の
いのちと共に いさおしは とわに此の世に輝かん
恨み憎しみのりこえて 覚りに登る^{さと}みたまなり
ただ安かれと ひたすらに仰ぎまういて祈らなん
戦没者追弔御詠歌 み仏の 教えかざして高らかに
ともにつかばや平和の鐘を

平成28年1月28日 ルソン島バギオ南西の山慰霊祭場にて

平成11年8月15日 追悼のことば

静岡市清水遺族会 鈴木喜代枝

改めて振り返ってみますと、私の父の召集は昭和19年9月20日、その時の父の年齢は37歳、母が35歳でありました。長女の私は小学校五年生、更に

妹4人が居て、5人姉妹ですが一番下の妹はまだ1歳でした。

出征する際、父は私を呼んで申しました。「戦争はもう長くないだろう。すぐ終わると思うが、あなたがお姉さんだから、母の言うことを聞いて妹たちの面倒を見て欲しい、頼んだよ」と。これが父の最後のことばになろうとは、当時の私には考えられないことでした。しかし、この“父のことば”が長い間私の心の支えとなりました。とうとう終戦になり、近所でもあちらこちらの家で復員して帰ってきます。私たちも父の帰りを今日か明日かと一日千秋の思いで待ち続けておりましたのに、終戦の日から2年も経ったある日、それは「父の戦死」の知らせでありました。

フィリピン・レイテ島・カンギポット山

昭和20年3月17日 戦死

空しい1枚の紙にしぼし呆然となるばかりでした。母は私達に涙は見せませんでしたが、夜私達が寝静まると佛様の前で何か語らいながら泣いているのでした。母が一番辛かったと思います。

それから片親だけの就職、進学問題など何かにつけて、こんな時に父が居てくれたらと私がひとりで泣いた夜もありました。苦しくて長いながい年月。しかし私たちは互いに励まし助け合いながら懸命に努力してきました。それに地域の暖かいご支援もあって私達は困難な時代を乗り越えることができたと考えております。

戦後の日本は民主国家として再生し、経済の発展に力を尽くして、今日の平和と繁栄を築き上げました。しかし、その陰には過ぎし大戦において祖国の安泰を願い、家族を案じながら戦場で散り、戦火にたおれ、異郷の地で亡くなられた尊い生命の犠牲がありました。更に国内でも多くの方々が戦争の被災者として生命をなくしています。その数は幾百万人という尊い人柱があったことを忘れてはならないと思うのです。

少し前になりますが、静岡県遺族会主催で海外の戦跡地慰霊巡拝のお話がありまして、父の終焉地フィリピン・レイテ島での慰霊祭でしたから、私はとびつくように申し込みました。第1回の平成元年と第四回の平成4年との2度参加させていただき、レイテ島での慰霊祭に深い感激を味わいました。

国旗日の丸の掲揚と君が代斉唱、海ゆかばと靖国の歌そして般若心経を唱えているうちに、胸がこみあげ涙が頬に止めどなく流れる。涙、涙の慰霊祭でした。

遺族の皆様、異国で多くの英霊が待っております。できたら一人でも多く巡

拝に参加して供養して欲しいと思います。

また、レイテ島は激戦の跡地で復興ができていないこと、住民が貧しい生活ぶりであったこと等、悲惨な戦争の傷あとに驚きを禁じ得ませんでした。

靖国神社について、先日の新聞報道によりますと、政府は公式参拝の復活のためと、更には宗教を問わず国民全体が慰霊できるように神社の在り方を見直し環境整備を図る考えとのこと。今世紀中に解決したいという政府の熱意に期待したいと思います。

最後に、日本が戦争のない平和な国として栄え、美しい日の丸の旗が平和の象徴となって世界の空に翻ることを心から念願するものでございます。

ここに私のつたない述懐を、わが父の御霊と併せて清水市戦没者の御霊に捧げ、謹んで御霊の平安をお祈りいたします。 合 掌

父の温もり

静岡市清水遺族会 小野塚通子

サイパンの 砂を握りて 父偲ぶ

ほのかな温み 伝えん母に

平成 24 年に日本遺族会からマリアナ諸島慰霊友好親善使節団員としてサイパン島を訪れた時の想いです。

父は昭和 18 年に出征し、浜松の連隊にいたわずかな期間に面会に行った時のことです。祖父母と母、弟と私が浜松駅に降りたつと、人ごみをかき分けて父が現れ私を抱き上げました。まだ三歳に満たなかったのに何か月ぶりにあった父の笑顔とその大きな手の温かさをかすかに覚えています。間もなく中国に、そしてサイパン島に行ったのでした。

あれから 70 年近くたったこの日、私の記憶に残っているかすかな温もりを求め、サイパン島の海岸に立ち、砂を握りしめました。

思い起こせば平成になってから母にサイパン行きを勧めたことがありましたが、「お父さんが散ってしまった地の上を歩くことはできない」と頑なに拒否され、以来サイパンのことは話題にしないよう気遣ってきました。

私が六歳ころだったでしょうか。外遊びから家に帰ると、見知らぬ男の方がいて、そばにはうなだれ涙を流している祖父母と母がいました。事情を知らない私は母の顔を覗き込み「どうして泣くの」と聞いたことを鮮明に覚えています。後に祖母が話してくれました。父の戦死の公報が入り、合同葬儀が済んでも家族は父の死を信じられずにいたところ、同じ部隊で帰還された方が富山にいと知り、母が手紙を書いたそうです。あの頃交通事情は悪く食料も乏しい

なか我が家を探すのはさぞ大変なことだったろうと頭が下がります。

そして辛い経験を話してくれたのです。

昭和19年7月18日の朝、父は海岸に残り、その方は食料を取る班で山に入ったとき艦砲射撃を受けたが奇跡的に助かり、海岸に戻ってみると、そこには草一本も無くすべて洗い流されていたこと。我家の餅つき用臼を指さし、この位大きな爆弾が雨霰あられの如く振ってきたとの話に、家族は父の生還を諦めたそうです。父の悲惨な最後を知った母は、サイパンの土を踏むことができなかったのです。

埼玉県遺族会長杉山さんが団長、深津さんも参加された使節団に私は埼玉県から参加しました。それがご縁で今回護国神社での再会となり、同じ世代を生きの方々と、心休まる時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。